



都上りの詩篇 詩篇124篇

詩124


2012.12.12

1. 主はわれらの味方 (われらとともに)



2-5 逆者 大水が走れり。

大水 Ps18:4, Rev12:15  Ark

6-7 われらが助け出されり。(歯-ハ) 

翼 Ps18:10, Rev12:14 YOC HLT

8 われらが助けは 天地を造られた主の御名に。

出エジプト記19:4, 申32:11



創19:16 G. JモラカSDTが述べらる。 H4422 wadot

PDの教 主と地味

主はイスラエルは言え。 Ps118:2 主の恵みはとこし。 Ps118:5-9 味方, Ps118:10-14 困む 主の御名にあり。

Ps115:9 主に信頼せよ。 われら助け 我 盾 である。

申33:29 幸い言え イスラエル。 主は 助け 盾 である。

主は味方 - 10-P8:31 神の愛の中に。

詩篇124篇。都上りの詩篇の5つ目。5つずつに分かれていますので、最初の15個の詩篇の最初の5つの終わりの部分です。

「主が味方である。私たちの助けは天地を造られた主の御名にある。」という言い方で囲まれています。1から5節と6から8節という2つの大きな災い。前半は、大水の災い。後半は、歯の餌食にされるということですが、鳥が蛇に食われるような、そういうところから翼に乗って助けられるかのようなものですね。その2つの救いについて書かれています。「大水の災い」と「翼に乗ってその小さな鳥が親の翼に乗って救われる」ということは、思い出す箇所がありますよね。特に、思い出さなくてはいけないところというのは、詩篇18篇。詩篇の18篇の中には、この大水のことと、翼に乗って救われるということが、両方書かれています。翼に乗って救われるのは、18篇10節のところから。大水から引き上げられるは、16節のところ。その両方があります。

もう一つ大切な所で、両方出てくる箇所、これは、黙示録の12章エルサレムが裁かれるところ。そして、教会が救われると巨大な竜と戦っているところですね。12章の13節から17節のところ です。女は大鷲の翼を2つ与えられて飛んで逃げていく。ところが蛇は、その口から水を川のように吐き出して、大水で押し流そうとするということで、ここで翼で鳥のように逃げ去るということと、大水でその攻撃が来る、災いが来る、蛇から来るというようなことが両方入っています。翼に乗って救われるという言い方は、出エジプト記19章4節のところにあるように、エジプトから連れ出されるということを表している一つの象徴的なものですね。申命記の32章にも同じように、そのことが記録されています。

大水の方は、ノアやヨナをもちろん思い出すわけでしょ。そうすると、契約の箱の中に入って守られる。翼の方は、ケルブに乗って飛びという話がありますけれど、そのケルビムがいて、その災いの中から連れ出される、救い出されるというのが、二つ救われる形式が違ってきますよね。連れ出される、救い出されるという言い方は、創世記19章のソドムとゴモラからロトが連れ出される、逃れ出るという言い方が最初です。そのロトのところには、「連れ出される、連れ出される、連れ出される」ということが強調されていますけど、この災いの中から連れ出される、災いの中で、契約の箱の中で守られることが、その二つにこの「大水」と「つばさ」ということになっていますので、契約の箱とケルビムという神殿の中心にある部分ですね。その契約の箱を表している救い。契約の救いを表しているような構造になつてくるといえるかなということが言えます。

「さあイスラエルは言え」というのは124と129にありますけれど「さあイスラエルは言え」というのは、他の箇所にもあります。それが119篇を挟んだ反対側118篇のところに「さあイスラエルよ言え、さあアロンの家よ言え、さあ主を恐れる者たちよ言え」という118篇があります。118篇の「主の恵みはとこしえというふうに言いなさい」ということ。115篇にもあります。115篇にも「イスラエルよ、アロンの家よ、主を恐れる者よ」という言い方があります。この二つの「さあイスラエルよ言え」というところを見ると、118篇の5から9のところには、「主は私たちの味方、私は恐れない、私を助けてくださる私の味方」というような言い方がありますね。10から14のところでは、「私を囲む、囲んで救ってくださるその救いは、主の御名にあります」という言い方があって、私たちの味方だ。私たちを囲んでいるという救いの方法について、118篇で言いますね。115篇の方は、「主に信頼せよ、我らの助けまた盾である」という言い方ですけど、我らの助け、また盾であるということだと考えると、「救われること、助け出されること」と、「盾で囲まれること」。これが救いの二つの側面ということなんじゃないかな。その元々のところは、申命記33章の「幸いな者イスラエルよ」モーセが最後に祝福する言い方です。その「幸いな者、イスラエルよ」という中で、「主は助ける盾である」。それは29節33章の歌の最後のところで、「主は私たちに助ける盾である」というように転移していますけれど、その神様の助けについて、囲まれて守られることと、災いの中から連れ出されること。それが、その契約の救いの大きな二つであるということが、この124篇の構造からも分かると思います。

新しい時代、イエス様が来られた後に、主は私たちの味方であるということは、ローマ8章のところに、「神が私たちの味方であるなら、誰が私たちに敵対できるでしょう」というよく皆が覚えているところですね。「キリストの愛から引き離すのは誰ですか」という箇所に、「主は私たちの味方であるなら」ということが書かれていますね。それは神の愛のうちに私たちが留まるならば、神様の愛は私たちに囲んで、全ての災いから救ってくださるということが、ローマの神の愛についての結論の部分に書かれている通りです。契約の箱、神様の命令、キリストの愛の命令のうちに留まって、必ずその中で守ってくださる。その中に留まらせてくださるという圧倒的な勝利について語っているわけですけど、124篇も、その圧倒的な勝利を語って、「天地を造られた主の御名に賛美を捧げる、ほむべきかな」というのが124篇です。